

博士論文（副論文 2）

我が国における
意味のある作業と
意味のある作業以外の作業の特徴
～1995年から2010年の事例検討～

2017年3月

指導教員 石井 良和 教授

首都大学東京大学院 人間健康科学研究科
（博士後期課程）

人間健康科学専攻 作業療法科学域

大松 慶子

研究

我が国における意味のある作業と意味のある作業以外の作業の特徴

～ 1995 年から 2010 年の事例検討 ～

大松 慶子 ^{1) 2)}, 石井 良和 ³⁾, 山田 孝 ^{4) 5)}

- 1) 関西学研医療福祉学院作業療法学科
- 2) 首都大学東京大学院人間健康科学研究科博士後期課程
- 3) 首都大学東京大学院人間健康科学研究科
- 4) 目白大学大学院リハビリテーション学研究科
- 5) 首都大学東京名誉教授

要 旨

1995 年～2010 年発行の雑誌に投稿された意味のある作業等の言葉を使用した事例検討論文から、意味のある作業と意味のある作業以外の作業の特徴の抽出を行った。その結果、意味のある作業はその作業に従事するクライアントの性別・疾患・発症から意味のある作業に従事するまでの期間を限定せず、クライアントの年齢は 20 歳以上であった。作業の種目は、日常の生活を構成する作業に訓練を加えたものであり、興味や嗜好、役割に関連した種目が有意に多かった。導入時はクライアントの話を聞いたものが 97.9% であった。その作業に従事する事で 98.6% のクライアントが改善し、うち作業遂行状態の改善が 37.6% にみられた。意味のある作業以外の作業は日常の生活で取り上げられる機会が少ない訓練や移乗・移動等の種目が有意に多かった。導入時は作業療法士の考えによったものが 70.7% であった。従事した結果は、クライアントの改善が 25.1%、そのうち、作

業遂行の改善は 3.1%であった。維持～悪化は 64.2%であった。クライアントが自ら選択した意味のある作業に取り組む事は、健康に繋がる事が確認された。

Key words: 意味のある作業，作業療法，
意味のある作業以外の作業

2013 年 4 月 10 日受付，2014 年 1 月 13 日受理
作業行動研究 17:211-220, 2014.

ORIGINAL ARTICLE

The features of meaningful occupations and occupations
except them in Japan: the examination of case studies
from 1995 to 2010

Keiko Omatsu^{1) 2)}, Yoshikazu Ishii³⁾,
Takashi Yamada⁴⁾

1) MS, OTR, Division of Occupational Therapy,
Kansaigakken Medical Welfare College

2) Doctoral Student at School of Human Health Science,
Tokyo Metropolitan University

3) PhD, OTR, Division of Community-Based Occupational
Therapy, Master and Doctor Program in Occupational
Therapy, Graduate School of Human Health Science,
Tokyo Metropolitan University

4) PhD, OTR, Graduate School of Rehabilitation Science,
Mejiro University

5) Professor Emeritus, Tokyo Metropolitan University

Abstract

The purposes of this study are distinguishing and
comparing meaningful occupations and the occupations
except them in Japan. The subjects of this study are the
case studies that used meaningful occupations and
similar words, published from 1995 to 2010. As the
results, clients who engaged the meaningful occupations

were adults and weren't restricted within sex, disease, periods from clients were taken illnesses to engage the meaningful occupations. Kinds of the occupations were occupations in life and exercises. Meaningful occupations were reflected in client's subjective views. When the meaningful occupations were introduced by occupational therapists to clients, they listened the client's opinions. Those were 97.9% of all meaningful occupations. The 98.6% results that clients engaged the meaningful occupations brought the client's improvement and the 37.6% results improved the clients occupational performances. The occupations that authors didn't write meaningful occupations were significantly more in exercise with bare hands, movement and transfers. The 70.7% occupations that clients engaged the occupations that authors didn't write meaningful occupations were introduced by occupational therapist's opinions. The 25.1% results that the clients engaged the occupations brought client's improvements, and the 3.1% results improved client's occupational performance. Those 64.0% results were maintaining or becoming worse in client's conditions. We confirmed that engaging in meaningful occupations contributed for the client's well-being.

Key words: meaningful occupation, occupational therapy, the occupation except meaningful occupation

Received on April 10, 2013, Accepted January 13, 2014.

Japanese Journal of Occupational Behavior 17:
211-220, 2014.

はじめに

作業療法（以下，OT）は，作業がうまくできないというクライアントの問題を解決する職業であり，治療的介入に作業を用いる¹⁾．そして，OTはその人にとって意味のある作業に焦点を当てることが重要だとされている²⁾．

意味のある作業とは，個人や集団や地域にとって個別的な意味があり，納得のいく経験を促すために選択され，遂行される作業³⁾とされる．しかし，OTの臨床では，クライアントにとって意味のある作業であるか否かが不明な作業や作業形態⁵⁾（以下，作業）を用い，目標にすることも多い．これは，我が国に北米から医学モデルの作業療法が導入され，その後，医療の中で作業療法が発展してきたためであると考えられている^{6) 7)}．しかし，北米では1980年代には作業の意味が見直され，クライアント中心で作業に焦点を当てた新たなパラダイムが生まれていた^{8) 9)}．その動きは我が国でも近年徐々に強まり，その中で意味のある作業や類似のことばが使用されている^{10) 11)}．

筆者らは先行研究（文献）において，日本の作業療法士（以下，OTR）が考える意味のある作業と類似の言葉が示す内容と関係を検討した．その結果，意味のある作業は類似の言葉を代表し，〈自ら意思表示した〉もので，〈クライアントにとって特別な思いがある〉ものであり，〈生活史の中にある〉ものであった．さらに，〈能力を発揮し前向きな作業参加と役割を引出す連鎖を生み出す〉もので，〈OTRとの協業により課題を解決した成功体験を得られる〉ものであり，〈自分自身や人生を肯定的に認め生きることの支えとなる〉ものであることがわかった¹²⁾．では，意味のある作業と類似の言葉（以下，意味のある作業）とそれ以外の作業（以下，意味

のある作業以外の作業)は、どのような違いがあるのだろうか。

本研究の目的は、意味のある作業とそれ以外の作業の違いを明らかにすることである。結果は、OTRが臨床の場でクライアントの意味のある作業を見出し、その作業に従事することで、クライアントの変化を生み出すことに貢献できると考える。

本研究の方法

対象

意味のある作業の言葉を用いるクライアント中心の作業療法に関する理論は2000年までに我が国に伝えられた^{4) 13)}。先行研究(文献)では、意味のある作業の言葉が日本作業療法学会の演題抄録で初めて用いられたのは1997年であった。このため、1990年代後半から現在までは、意味のある作業という言葉が日本の作業療法界に広まっていった期間であると考えられた¹¹⁾。また、臨床のOTRの考えは、事例検討に最も反映されやすいとも考えた。これらより、対象を1995年度から2010年度に発行された雑誌とし、OTRが筆頭筆者の投稿による事例報告のうち、意味のある作業という言葉を用いている論文を抽出した。これは、意味のある作業と意味のある作業以外の作業の特徴を検討するには、意味のある作業が何らかの定義によって他の作業と区別される必要があるためである。

これらの論文を、医学中央雑誌の文献検索(2011年7月21日実施)によって抽出した。キーワードは先行研究¹¹⁾から、意味 and 作業、価値 and 作業、重要 and 作業とした。しかし、この文献検索では2000年以前の文献は挙がらなかったため、確認のために対象の全期間について手検索で「作業

療法」,「作業行動研究」「作業療法ジャーナル」の特別号を除く全冊子の中から抽出した。その際,作業は「意味のある活動のまとめ」とされる¹⁴⁾ことから,作業活動または活動と表現されたものも加えた。事例報告は,OTRが事例に介入し,その変化を考察したものと限定した。

方法

対象文献から以下の項目を抽出した。1)クライアントの年代,性別,主疾患名,2)発症後,意味のある作業に従事するまでの期間,3)意味のある作業についての以下の事項。①種目,②導入の経緯,③その作業を見出すために用いた,クライアントの考えや生活史を聞く評価法,④その作業に従事した後のクライアントの変化,4)意味のある作業以外の作業についての以下の事項。①種目,②導入の経緯,③その作業に従事した後のクライアントの変化である。種目については二項検定を用いて検討し,他の項目は内容毎に分類・検討した。統計解析にはMicrosoft Excel 2010を使用し,有意水準を5%未満とした。

なお,対象文献の多くは,クライアントが,まず意味のある作業以外の作業に取り組み,その結果が望ましいものではなかったために意味のある作業を探すという過程で記述されていた。

結果

1. 対象文献

対象は24文献25事例となった(表1)。

2. クライアントの特徴

1) 年代,性別,主疾患名

性別は男性10名,女性15名であった。年齢は20から90歳代まで各年代だったが,0から10歳代はみられなかった。

内訳は，70歳代が5名，次いで40歳代，60歳代と80歳代が各4名等であった．主疾患名は脳血管疾患が8名，統合失調症が6名，悪性腫瘍・整形外科系疾患・認知症・廃用症候群が各2名等であった（表2）．

2）発症後意味のある作業に従事するまでの期間

クライアントが発症後，意味のある作業に従事するまでの期間を，症状の変化が予想される期間は短く，その変化が少ないと考えられる期間は長く区切って分類した．内訳は，発症～3か月未満と1年～3年未満が各4名，3か月～1年未満と20年～25年未満が各3名，3年～5年未満，5年～10年未満，10年～15年未満が各2名，25年以上が1名等であった（表2）．

3）作業の種目

意味のある作業と意味のある作業以外の作業は，それぞれ，48件と58件が報告されていた．これらの作業を，OT白書2005に用いられた身体障害保健，精神障害保健，老年期障害保健の福祉・介護領域OTの手段の分類¹⁵⁾を参考に分類した（表3）．意味のある作業では，「交流」，「その他の手工芸（ネット手芸，タイルモザイク，手芸，プラモデル製作）」，「家事」が各4件で最も多かった．次いで，「外出・散歩・旅行」，「園芸」，「徒手的訓練」，「移動・移乗」，「音楽」の各3件となっていた．意味のある作業以外の作業では，「徒手的訓練」，「移動・移乗」が各9件と最も多く，次いで「車椅子」の5件等であった．これらの作業について二項検定を行った結果，意味のある作業では有意水準5%未満で，「交流」，「その他の手工芸」，「家事」が有意に多かった．意味のある作業以外の作業では，有意水準1%未満で「徒手的訓練」，「移動・移乗」，有意水準5%未満では「車椅子」，「革細工」，「交流」，「器具を用いた訓練」，「家事」，「起居」が有意に多かった．

表1 対象文献						
No	題名	著者	雑誌名	Vol	No	年
1	ある女性高齢障害者に対しての人生観を考慮した作業療法	岸上博俊、村田和香	作業療法	19	2	2000
2・3	作業遂行プロセスモデルを利用した事例報告 事例1 事例2	原田千佳子、吉川ひろみ、近藤敏、他	作業療法	20	6	2001
4	作業療法介入過程モデル(OTIPM)に基づくアプローチ	建木建、建木良子、斎藤さわ子	西尾市民病院紀要	12		2001
5	作業的存在としての対象者を援助することの意味-慢性期精神分裂病の一症例を通じて-	一原里江、小川小枝子、青山宏、佐藤剛、 Florence A. Clark	作業療法	21	5	2002
6	高齢脳性麻痺者の語りを通した人生と作業療法の個人的意味づけ	野藤弘幸、山田孝	作業行動研究	6	2	2002
7	長期入院精神分裂病患者に対する集団精神療法の治療的利用	四本かやの	神戸大学医学部保健学科紀要	18		2002
8	「作業に関する自己評価」により、状態悪化を引き起こしていた友人の死別体験が明らかになった高齢障害者に対する支援	山田孝、石井良和	作業行動研究	7	1	2003
9	人間作業モデルは新人作業療法士に効果ある作業療法を可能にさせた	京極真、野藤弘幸、山田孝	作業行動研究	7	1	2003
10	知的機能を必要とする作業が情動の変化に与える影響-ワープロ作業への取り組みに伴い暴力行為が減少した1症例の検討から-	竹田里江、青山宏	作業療法	24	6	2005
11	通所リハビリテーションにおいて詩吟の先生の役割を再獲得した1症例	小川真寛、藤原瑞穂、常本浩美	作業療法	25	6	2006
12	離院と自殺企図を繰り返す統合失調症患者に対する1対1作業療法の意義について	大島久典、四本かやの	作業療法	26	2	2007
13	寝たきり状態からの脱出の支援	長谷川由美子、山田孝	作業行動研究	10	1・2合併号	2007
14	癌告知を受けた女性に「生きる証」の作業をもたらしした叙述に基づく作業療法	原田佳典、野藤弘之	作業行動研究	10	1・2合併号	2007
15	意欲低下を示した後記高齢女性に対するナラティブを重視した作業療法の効果	木村美久、山田孝	作業行動研究	11	1	2007
16	緩和ケアにおけるOSAⅡの有効性	大形 篤	作業療法おかやま	17		2007
17	作業機能障害を予防して活動的な生活を再構築できた事例～作業に関する自己評価・改訂版(OSA-Ⅱ)を用いた作業療法経過から～	河津拓、野藤弘幸	作業行動研究	11	2	2008
18	作業同一性を反映した作業に焦点をあてた訪問リハビリテーションがクライアント夫婦のコミュニケーションと交流を深めた事例	南征吾、野藤弘幸、山田孝	作業行動研究	12	2	2009
19	入退院を繰り返す中で、作業適応を再獲得した高齢女性	宮本優子、野藤弘幸、山田孝	作業行動研究	12	2	2009
20	介護老人保健施設に入所している脳卒中維持期のクライアントに対する人間作業モデルを活用した作業療法実践～重度の麻痺と失語症の事例に対する作業療法の実践～	篠原和也、澤田有希、山田孝	作業行動研究	13	1	2009
21	価値ある作業に従事することで生活を再構築し始めた事例	宗形智成、藤本一博、山田孝	作業行動研究	14	2	2010
22	「何したらいいかわからない」と語る統合失調症者に対する地域生活移行支援～人間作業モデルを用いた介入～	青山克実、永久泰道、他	作業行動研究	14	3	2010
23	興味と価値をおく作業への参加が自己効力感の向上に結びついた事例	林 孝祐、野藤弘幸	作業行動研究	14	3	2010
24	高齢期の危機と気づき-ユリとハナの新生活構築 2. ハナ(作業療法が介入したケース)	小田原悦子、坂上真理	作業療法ジャーナル	44	8	2010
25	がん生存者に対する協力的作業療法の有用性	沼田士嗣、村田和香、池田保	作業療法	29	4	2010

表2 クライエントの概要

性別	
男性	10
女性	15
年齢	
20 歳代	2
30 歳代	1
40 歳代	4
50 歳代	2
60 歳代	4
70 歳代	5
80 歳代	4
90 歳代	3
主疾患名	
脳血管疾患	8
統合失調症	6
悪性腫瘍	2
整形外科系疾患	2
認知症	2
廃用症候群	2
脳性麻痺	1
パーキンソン病	1
スタージャーウェーバー症候群	1
発症後 意味のある作業に従事するまでの期間	
発症～3 カ月未満	4
3 ヶ月～1 年未満	3
1 年～3 年未満	4
3 年～5 年未満	2
5 年～10 年未満	2
10 年～15 年未満	2
15 年～20 年未満	0
20 年～25 年未満	3
25 年以上	1
不明	4
計	25

(名)

表3 作業の種目

意味のある作業		種目	意味のある作業以外の作業	
p	件数		件数	p
0.403	0	生活管理	1	0.067
0.403	0	入浴	1	0.067
0.403	0	車椅子	5	0.016*
0.403	0	書字	1	0.067
0.403	0	革細工	3	0.036*
0.403	0	体操	2	0.051
0.049*	4	交流	3	0.036*
0.080	2	技芸	0	0.348
0.092	1	食事	2	0.051
0.092	1	器具を用いた訓練	3	0.036*
0.080	2	その他のゲーム	1	0.067
0.092	1	家族相談・指導	0	0.348
0.064	3	外出・散歩・旅行	1	0.067
0.092	1	就労相談・指導	0	0.348
0.080	2	紙細工	1	0.067
0.092	1	ビーズ手芸	0	0.348
0.049*	4	その他の手工芸	0	0.348
0.064	3	園芸	0	0.348
0.092	1	パソコン	0	0.348
0.092	1	映画鑑賞・漫画を読む	1	0.067
0.064	3	徒手的訓練	9	0.002**
0.049*	4	家事	4	0.024*
0.064	3	移動・移乗	9	0.002**
0.080	2	起居	4	0.024*
0.092	1	絵画	1	0.067
0.064	3	音楽	1	0.067
0.092	1	整容・衛生	2	0.051
0.092	1	その他の軽スポーツ	1	0.067
0.092	1	その他の仕事活動	0	0.348
0.092	1	更衣	0	0.348
0.092	1	排泄	2	0.051
48		計	58	

(件)

(件)

二項検定

** $p < .01$ * $p < .05$

表 4 クライアントに作業を導入した経緯

意味のある作業		導入の経緯	意味のある作業 以外の作業	
%	作業 の数		作業 の数	%
56.3	27	考えや生活史を問う 評価法を使用した	2	3.5
20.8	10	生活史を聴取した	0	0.0
10.4	5	クライアントや家族 からの申し出によっ た	5	8.6
8.3	4	クライアントの思い を聴取した	0	0.0
2.1	1	観察と会話から	0	0.0
2.1	1	施設のプログラムを 利用した	1	1.7
0.0	0	OTRの考えによる (クライアントの 了承不明)	38	65.5
0.0	0	OTRの考えによる (クライアント 了承)	3	5.2
0.0	0	クライアントと OTRが相談した	5	8.6
0.0	0	スタッフの 働きかけによる	1	1.7
0.0	0	不明	3	5.2
100.0	48 (件)	計	58 (件)	100.0

表 5 クライアントの考えや生活史を聞く評価法

評価法	事例数
OSA, OSA-II	6
日本高齢者版興味チェックリスト, NPI 興味チェックリスト	4
COPM	3
役割チェックリスト	1
OPHI-II	1
計 (件)	15

1 事例に複数の評価法を用いた場合あり

OSA ; Occupational Self Assessment

COPM ; Canadian Occupational Performance Measure

OPHI-II ; Occupational Performance History Interview-Second Version

4) 作業を導入した経緯

OTR がクライアントに作業を導入した経緯を作業ごとに抽出した (表 4)。結果は、意味のある作業では、クライアントの考えや話、または家族の考えや話を聞いて導入した作業が 47 件 (97.9%) であった。その内訳は、「考えや生活史を問う評価法を使用した」が最も多く 27 件 (56.3%)、次いで「生活史を聴取した」が 10 件 (20.8%)、「クライアントや家族からの申し出によった」が 5 件 (10.4%) 等であった。

意味のある作業以外の作業では、OTR の考えによって導入した作業が 41 件 (70.7%) であった。その内訳は、「OTR の考えによる (クライアントの了承不明)」が 38 件 (65.5%)、「OTR の考えによる (クライアント了承)」が 3 件 (5.2%) であった。その他、「クライアントや家族からの申し出によった」、「クライアントと OTR が相談した」が各 5 件 (各 8.6%)、「考えや生活史を問う評価法を使用した」が 2 件 (3.5%) 等であった。

5) 意味のある作業を導入するために用いた考えや生活史を聞く評価法

意味のある作業を導入する際に用いられたクライアントの考えや生活史を尋ねる評価法は 15 件であった (表 5)。その種類は、作業に関する自己評価 (Occupational Self Assessment ; OSA) ¹⁶⁾ およびその改訂版 (OSA-II) が 6 件、日本高齢者版興味チェックリスト ²⁰⁾ および NPI 興味チェックリスト ²¹⁾ が 4 件、カナダ作業遂行測定 (Canadian Occupational Performance Measure ; COPM) ²²⁾ が 3 件、役割チェックリスト ¹⁷⁾ と作業遂行歴面接第 2 版 (Occupational Performance History Interview-Second Version ; OPHI-II) ¹⁸⁾ が各 1 件であった。

6) 作業に取り組んだ結果

クライアントが作業に従事した後の変化は、25 種類が示されていた (表 6)。意味のある作業では、1 つの作業に対し 1~8 種類の結果が報告されていた。中央値は 2、四分位

範囲は2であった。意味のある作業以外の作業では、結果が示されていないものもあり、1つの作業に対し0～2種類が報告されていた。中央値は1、四分位範囲は0であった。

意味のある作業に取り組んだ結果は、改善が98.6%であった。その内訳は、「自分の考えを表出した」が26例（18.4%）、「自信につながった」、「新たな作業へつながった」が各15例（各10.6%）、「行動の改善を促した」が14例（9.9%）、「身体機能の改善を促した」、「情緒が改善した」が各11例（各7.8%）、「交流を促進した」が10例（7.1%）の順になっていた。そのうち、新たな作業へつながった、行動の改善を促した、交流を促進したなど、作業遂行の改善と判断された結果は37.6%であった。

意味のある作業以外の作業では、改善が25.1%であった。内訳は、「身体機能の改善を促した」が12件18.8%、「交流を促進した」が2件（3.1%）、「情緒が改善した」・「不安の軽減」が各1件（各1.6%）であった。そのうち作業遂行の改善は3.1%であった。維持～悪化は64.2%であった。この内訳は、「身体機能の問題残存」が17件（26.6%）、「精神機能の問題残存」と「他者との協調に問題あり」が各6件（各9.4%）、「不安の訴え」が4件（6.3%）等の順になっていた。

考察

1. 意味のある作業の対象者と時期

意味のある作業には男女とも対象となっており、成人のほぼ全ての年齢層に渡っていた。しかし、20歳未満の若年者は対象にはなっていなかった。意味のある作業は、これらの若年者は対象にならないのだろうか。先行研究による意味のある作業の概念には〈生活史の中にある〉〈クライアントにとって特別な思いがある〉があった¹²⁾。成人はもちろ

表 6 クライアントが作業に取り組んだ結果

意味のある作業		結果	意味のある作業 以外の作業	
%	事例数		事例数	%
18.4	26	自分の考えを表出した	0	0.0
10.6	15	自信につながった	0	0.0
10.6	15	新たな作業へつながった	0	0.0
9.9	14	行動の改善を促した	0	0.0
7.8	11	身体機能の改善を促した	12	18.8
7.8	11	情緒が改善した	1	1.6
7.1	10	交流を促進した	2	3.1
5.7	8	目標につながった	0	0.0
5.0	7	作業を楽しんだ	0	0.0
4.3	6	役割を獲得するか 充実感を得た	0	0.0
3.5	5	作業療法士と 協業関係を構築した	0	0.0
3.5	5	精神機能の改善を促した	0	0.0
2.1	3	人的環境の変化を促した	0	0.0
0.7	1	作業の意義を見出した	0	0.0
0.7	1	習慣が生まれた	0	0.0
0.7	1	不安の軽減	1	1.6
0.7	1	身体機能の問題残存	17	26.6
0.7	1	問題の本質から 目をそむける	1	1.6
0.0	0	精神機能の問題残存	6	9.4
0.0	0	他者との協調に問題あり	6	9.4
0.0	0	不安の訴え	4	6.3
0.0	0	身体機能の悪化	2	3.1
0.0	0	依存性残存	2	3.1
0.0	0	生活管理能力の低下残存	2	3.1
0.0	0	自信の喪失	1	1.6
0.0	0	不明	7	10.9
100.0	141 (件)	計	64 (件)	100.0
2 (2)		結果の中央値 (四分位範囲)	1 (0)	

結果数の中央値 (四分位範囲)

: 1 作業の実施により生じた結果数から算出

作業遂行の改善と考えられる項目

んだが、若年者にも生きてきた間の生活史があり、特別な思いが反映された作業があると考えられる。また、辛島は幼児について、その感覚欲求を満たす活動などを「意味のある活動」と呼んでいる²³⁾。若年者の意味のある作業については、今後、検討が必要であろう。今回の結果からは、意味のある作業は成人の全ての年齢層が対象になると考えられた。

主疾患は脳血管疾患、統合失調症の順に多かった。これらは OT 白書 2010²⁴⁾の医療及び保健・福祉領域（身体障害及び精神障害）で最も多い疾患である。その他の疾患も、多くが上位に入る疾患であった。このことから、意味のある作業は作業療法の一般的な臨床場面でクライアントに用いることができると考えられた。

発症後、意味のある作業に従事するまでの期間は、発症～3 か月未満と 1 年～3 年未満が最も多かったものの、25 年以上も含まれていた。これにより、クライアントが意味のある作業に取り組む時期は発症後の期間が特定されるものではないと考えられた。

2. 作業の種目

意味のある作業の種目には興味や嗜好の反映と考えられる「その他の手工芸」や「交流」、「家事」が有意に多かった。全体に、人の日常の生活を構成する作業に訓練を加えたものがまんべんなく挙がっていた。これは、意味のある作業は個人の主観的意味づけにより異なることを示していると考えられた。

意味のある作業以外の作業は、意味のある作業よりも多数報告されていた。有意に多かった 8 種類の作業のうち、「家事」と「交流」以外は日常の生活で取り上げられる機会が少ない作業であった。「家事」は、作業療法白書 2010²⁴⁾の「作業療法の手段」の項では日常生活活動に含まれており臨床での実施頻度が明らかではないが、作業療法白書 2005¹⁵⁾の「作業療法の手段」では、医療領域、保健・福祉・介護領域とも中位前後に位

置している. このことから, 臨床場面で日常的に実施される作業であると考えられた. 「家事」と「交流」は意味のある作業と意味のある作業以外の作業に共通して有意に多い結果であった. これは, 取り上げる回数が多い作業ではあるが, クライエントの個人的意味づけにより生活の中での重要性が変化した結果であると考えられた. また, 日常的な趣味や楽しみの作業と考えられる「手工芸」や「園芸」, 詩吟や花道などの「技芸」はほとんど含まれていなかった. これらの結果より, 意味のある作業になりにくい作業は, 日常生活の中で取り上げられる機会が少なく, クライエントのこれまでの生活経験からの意味づけがされにくい作業であると考えられた.

3. 作業導入の経緯

意味のある作業では 97.9%がクライエントの意見や話しを聞いて導入していた. 種目の結果からも考えられるように, 意味のある作業はクライエントの主観によって様々な作業が対象になると考えられる. そのため, クライエントの意見や考えを聞くことが必要であろう. 自らそれを述べるのが難しいクライエントには, 生活史を聴取することが意味のある作業を見出すきっかけになる可能性があると考えられた. 一方, 意味のある作業以外の作業では, OTR の考えにより導入した作業が 70.7%であった.

これらのことから, 意味のある作業はクライエントや家族の意見や語り, 生活史を基に見出されるものであり, まさにクライエント中心の作業であると考えられた. 意味のある作業以外の作業は, OTR の考えの影響が大きく, クライエントの了承について検討されない場合もあると思われた. 関は, 「リハの領域ではインフォームド・コンセントを一步進めたインフォームド・チョイスを浸透するべきだ」と語った²⁵⁾. また, 鎌田らは, ターミナル期の患者に診断名を伝え治療法を選択してもらった結果, その人達が最期まで生き生きと生きた実例を示した²⁶⁾. そしてそれを, 「インフォームド・チョイス (医師

の説明と患者の選択)を実践した上で、本人が自分の生き方や治療法を『自己決定』してきたことが大きい」と述べている。クライアントが取り組む作業が意味のある作業であるためには、クライアントの希望を大事にする必要がある。そのためには OTR が選択肢を提示することも重要であろう。

4. 意味のある作業を導入するために用いた考えや生活史を聞く評価法

意味のある作業を見出すためには、その 56.3%にクライアントの意見や生活史を聴取する評価法が用いられていた。用いられた評価法は、カナダ作業遂行測定 (COPM)²²⁾と作業行動理論²⁷⁾に基づいた評価法であった。

意味のある作業を見出すには、クライアントが自分をどのように捉えているか、その考え、興味、役割、生活史を知り、心身機能状態とあわせ全体として捉えることが重要であろう。これらの評価法を用いることでクライアントの考えをより深く理解し、優先順位を知ることができると考えられた。Neistadt²⁸⁾は、多くの OTR がクライアントのゴールの優先順位を決定するためにインフォーマルなインタビューを用いていることを明らかにし、これらのインタビューから得られたゴールはぼんやりしており、特別な意味のある作業ではないと述べた。その上で、意味のある作業を見出すためにフォーマルな評価法を用いてクライアントの優先順位を知る必要性に言及している。クライアントと話しをすることは重要である。しかし、それだけでなく、意見を確実に聞き取ることができる評価法を積極的に使用することが必要であろう。

5. 作業に取り組んだ結果

意味のある作業は、クライアントが 1 つの作業に取り組むことによって中央値で 2 種類の結果が導き出された。その作業に取り組むことによって、目的以外の結果が生じた場合が多いと言えるだろう。これは、クライアントに関する個人的および環境的な要素

のダイナミックな相互作用によって生じる創発¹⁹⁾によると考えられた。

結果の内容は良好ではないものも一部あるが、多くはクライアントが自信を取り戻し、自分の意見を発言するようになり、情緒と作業遂行が改善していた。身体機能や精神機能自体の改善もみられていた。これらの結果は生き生きとした生活につながるものであると言えるだろう。クライアントのこのような変化は、世界保健機関の健康の定義にある身体的・精神的および社会的に良好な状態²⁹⁾に、より近づくことであると考えられる。人は、作業に取り組むことによって、自分自身の健康状態に影響を及ぼすことができる³⁰⁾。意味のある作業はそのような変化を可能にする事を再確認することができた。

意味のある作業以外の作業では、1つの作業に対し、中央値で1種類の結果が報告されていた。これは、取り組んだ作業の目的に対応した結果であると考えられた。内容は、改善が25.0%あるものの64.1%が維持～悪化であり、多くがクライアントの心身機能について述べられていた。意味のある作業以外の作業は、クライアントの作業遂行に影響を与えることは難しい可能性があると考えられた。

本研究の限界

本研究は、対象の期間を限定し意味のある作業を取り上げた事例検討に限ったものである。そのため、意味のある作業以外の作業についての記述が十分ではなかった可能性がある。今後、さらに検討することが必要である。

まとめ

1995年から2010年発行の雑誌に投稿された意味のある作業等の言葉を使用した事例

検討論文から、意味のある作業の特徴と、意味のある作業以外の作業の特徴を検討した。その結果、意味のある作業はクライアントの性別・疾患・発症後その作業に従事するまでの期間を限定せず、成人を対象にしたものであった。その種目はクライアントの主観を反映した日常生活上の作業と訓練の項目に広がっていた。導入時にはクライアントの意向を大事にしており、取り組んだ結果、情緒と作業遂行状態が改善していた。

意味のある作業以外の作業は、クライアントのこれまでの生活経験では意味づけが難しい作業が多く、導入時は OTR の考えに重きを置いていた。取り組んだ結果は、心身機能にかかわるものが多く、作業遂行の改善には結びつきにくいと考えられた。以上より、意味のある作業はクライアントがより健康になることに貢献する作業であることが確認できた。

謝辞

本研究にご助言いただきました社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団総合リハビリテーションセンター福祉のまちづくり研究所中園正吾先生、首都大学東京人間健康科学研究科石井研究室の皆様へ深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 山田孝：高齢者に対する作業療法の過程。山田孝（編），クリニカル作業療法シリーズ 高齢期障害領域の作業療法，中央法規出版株式会社，52～80，2010.
- 2) 岩瀬義昭，村井千賀，大庭潤平，吉川ひろみ・編，社団法人日本作業療法士協会監修：

- “作業”の捉え方と評価・支援技術 生活行為の自律に向けたマネジメント．医歯薬出版，27～44，2011.
- 3) カナダ作業療法士協会（吉川ひろみ・監訳）：作業療法の視点：作業ができるということ．大学教育出版，207，2002.
- 4) *ibid.*
- 5) Nelson, DL : Occupation: Form and Performance. *Am J Occup Ther*, 42:633-641, 1988.
- 6) 社団法人日本作業療法士協会：社団法人日本作業療法士協会 25 周年記念誌 シリーズ作業療法の核を問う．社団法人日本作業療法士協会，47～60，89～107，1991.
- 7) Kielhofner, G, Burke, JP（山田孝・訳）：アメリカにおける作業療法の 60 年 - その同一性と知識の変遷について - ．作業行動研究，5（1）：38～51，2001.
- 8) Kielhofner G（山田孝・監訳）：作業療法の理論 原著第 3 版．医学書院，27～69，2008.
- 9) 山田孝：日本の作業療法の歴史分析のために．作業行動研究，7(1):1～5, 2003.
- 10) 大橋秀行：学会長講演 意味のある作業の実現．第 45 回日本作業療法学会プログラム：32，2011.
- 11) 大松慶子，石井良和，山田孝：日本作業療法学会発表における意味のある作業とその類似の言葉の使用について．作業行動研究 16（3），176～182，2012.
- 12) 大松慶子，他：「意味のある作業」とその類似のことばが示す意味と関係について．第 46 回日本作業療法学会誌（CD-ROM），2012.
- 13) Kielhofner, G 編著（山田孝監訳）：人間作業モデルー理論と応用ー[改訂第 2 版]．協同医書出版社，1999.
- 14) Polatajko, HJ. Davis, JA. Hobson, SJG. Landry, JE. Mandich, A. et al.: Meeting the responsibility that comes with the privilege: Introducing a taxonomic code for

understanding occupation. Can J Occup Ther 71, 261-264, 2004.

- 15) 社団法人日本作業療法士協会：作業療法白書 2005 ―協会設立 40 周年記念誌―. 作業療法 25 特別：25～53, 2006.
- 16) Kielhofner, G (山田孝・監訳)：人間作業モデル―理論と応用―[改訂第 4 版]. 協同医書出版社, 東京, 266～274, 2012.
- 17) ibid, 278～281.
- 18) ibid, 287～293.
- 19) ibid, 25～28.
- 20) 山田孝, 石井良和, 長谷龍太郎：高齢者版興味チェックリストの作成. 作業行動研究, 6：25～35, 2002.
- 21) Matsutsuyu, JS (山田孝・訳)：興味チェックリスト. 作業行動研究 4：32～39, 1997.
- 22) Law, M. Baptiste, S. Carswell, A. McColl, MA. Polatajko, A. Pollock, N. (吉川ひろみ・訳)：COPM カナダ作業遂行測定[第 4 版]. 大学教育出版, 2009.
- 23) 辛島千恵子：共生の源―子どもの心に重なる意味と作業療法の可能性. OT ジャーナル 44：180～185, 2010.
- 24) 社団法人日本作業療法士協会：作業療法白書 2010 (オンライン). 入手先
〈<http://www.jaot.or.jp/wp/wp-content/uploads/2010/08/whitepaper2010.pdf>〉
, 25～69, (参照 2010-9-29).
- 25) 関啓子：患者と治療者との間を生きる 治療者としてどのように成長するか. OT ジャーナル 46：633～636, 2012.
- 26) 鎌田實, 高橋卓志：成熟した死の選択 インフォームドチョイス. 医歯薬出版, 1999.
- 27) 山田孝：解説 作業行動理論と遊び. Reilly M (山田孝・訳)：遊びと探索学習―知

的好奇心による行動の研究－. 協同医書出版社, 東京, 393～402, 1989.

28) Neistadt, M : Methods of assessing clients' priorities: A survey of adult physical dysfunction settings. Am J Occup Ther 49, 428～436, 1995.

29) WHO (島内憲夫・訳) : 21 世紀の健康戦略ヘルスプロモーション - WHO : オタワ憲章. 垣内書店, 1990.

30) Reilly, M : Occupational therapy can be one of the great idea of 20th century medicine. Am J Occup Ther 16:1～9, 1962.